

カントの『神の現存在の論証』における「良識」と「形而上学」に関する思考法

—批判期道德哲学の「良識」と「哲学」に関する思考法への萌芽—

中 沢 哲

はじめに

本論文の目的は、カントの前批判期の著作『神の現存在の論証』における、「良識」と「形而上学」に関するカントの思考法に、批判期の『人倫の形而上学の基礎づけ』¹における「良識」と「哲学」に関する思考法への萌芽が認められることを明らかにすることにある。『神の現存在の論証』では「良識」は、「良識（健全な理性）」、「自然的な普通の悟性（自然的な常識）」、「悟性の普通の理解力」、「ごく普通の悟性（常識）」、「自然的な良識（自然的な健全悟性）」、「普通の正しい理解力」、「良識（健全な悟性）」、「健全で美しい理性」と多様に表現されている。また『基礎づけ』では「良識」は、「ごく普通の悟性（常識）」、「自然的な良識（自然的な健全悟性）」、「普通の人間理性」、「普通の悟性（常識）」、「実践的な普通の理性」と表現されている。

『神の現存在の論証』における「良識」と「形而上学」について言及しているものに、浜田義文による考察がある。浜田は、本論文の一でも考察の対象となる『神の現存在の論証』の「序文」に、1760年代のカントの「新しい思想傾向」を読み取っている。それは、「伝統的な形而上学」の「ドクマチズム」に対する「懐疑」であり、「常識」（良識）尊重の立場である²。しかし管見によれば、浜田による考察を含め従来の研究には、『神の現存在の論証』における「良識」と「形而上学」に関するカントの思考法と、『基礎づけ』における「良識」と「哲学」に関する思考法との関連を論じたものはない。

拙論「カントの道德思想における「自然的な良識」とJ. J. ルソー」では「自然的な良識」およびその関連語を前批判期の著作に考察し、「自然的な良識」による認識と学問に依拠する認識という対照的な枠組みが、『基礎づけ』から『神の現存在の論証』にまで遡ることができることを明らかにした³。しかし拙論では、『神の現存在の論証』における「良識」と「形而上学」に関するカントの思考の特色を詳細に考察するには至らなかった。そこで本論文では、『神の現存在の論証』における「良識」の諸表現に関する記述に焦点を当て、「良識」と「形而上学」に関するカントの思考法を考察していく。こうした考察を通じて、カントの形而上学的認識への志向と『神の現存在の論証』に現れる「良識」による認識への志向が、『基礎づけ』における哲学的認識と「良識」に関するカントの思考法へと結実し、批判期道德哲学展開の思考法へと発展していくことを明らかにしたい。

一．「良識」と「形而上学」

カントの「良識」と「形而上学」に関する思考法は、『神の現存在の論証』の「序文」の冒頭段落に現れる。

(1) 「摂理は、幸福にとって最も必要なわれわれのこの認識が、精細な (fein) 推論の理屈 (Spitzfindigkeit) に依拠することを望んではおらず、摂理は、その認識を自然的な普通の悟性 (自然的な常識) (natürlicher gemeiner Verstand) に直接ゆだねているのである。」(『神の現存在の論証』A65) (下線は筆者による。以下同様である。)

この文章は『神の現存在の論証』の「序文」の冒頭段落の一節である。「幸福にとって最も必要なわれわれのこの認識」とは、「神は存在する」という認識である。神の存在の認識に関して、ここには「精細な推論の理屈」に依拠する認識と「自然的な普通の悟性 (自然的な常識)」による認識という対照がある。カントによれば、神の存在は「精細な推論の理屈」による認識に依拠しているのではなく、「自然的な普通の悟性 (自然的な常識)」によって認識される。神の存在の「自然的な普通の悟性 (自然的な常識)」による認識という主張を、カントは「良識 (健全な理性) の使用」という表現を用いて次のように述べている。

(2) 「それゆえ、良識 (健全な理性) の使用 (Gebrauch der gesunden Vernunft) は、普通の認識の制限の内にとどまっているにしても、この存在者の現存在と諸性質について十分に確信させる証明を与えるのである。それは、念入りの研究者 (subtiler Forscher) がそのいたるところに論証や、また厳密に規定された概念の精確さや規則的に結合された理性推論の精確さが欠けていることを嘆いても (obgleich), そうなのである。」(『神の現存在の論証』A65)

カントによれば、「良識 (健全な理性)」による認識を通じて、神の「現存在と諸性質」について十分に確信することができる。カントの「良識 (健全な理性)」による認識の主張には、次のような内容の, obgleich によって導かれる従属節が付随している。すなわち、「良識 (健全な理性)」による認識を通じた証明は、「念入りの研究者」を満足させるような証明ではない。この証明には、「念入りの研究者」が求めるような「厳密に規定された概念の精確さや規則的に結合された理性推論の精確さ」が備わっていない。こうした事実がある「にもかかわらず」(obgleich), カントによれば、「良識 (健全な理性) の使用」によって神の「現存在と諸性質」について十分に確信することができるのである。

序文の冒頭段落では、神の存在の認識について二通りの認識方法が述べられている。一方に、「精細な推論の理屈」に依拠する認識、あるいは「念入りの研究者」を満足させるような「論証」を伴う認識があり、他方に「自然的な普通の悟性 (自然的な常識)」あるいは「良識 (健全な理性)」による認識がある。カントは神の存在の認識に関して、前者ではなく後者を主張するのである。ところが、これに続く文は「それにもかかわらず」(Gleichwohl) という副詞で始まる。

(3)「それにもかかわらず (Gleichwohl), このような論証がどこかに現れるのではないかと探さずにはいられない。というのは、これほど重要な認識において、完璧なもの、明白に概念把握されるものに到達したいという、探求に慣れている悟性の捨てることのできない正当な欲求 (billige Begierde) を持ち出すまでもなく、もしこのような認識がわがものとなれば、この対象に関するあまたの事柄を明らかにする (aufklären) ことができるということが期待できるからである。」(『神の現存在の論証』A65)

神の存在は「良識 (健全な理性)」による認識を通じて十分に確信される。「それにもかかわらず」、カントは「念入りな研究者」を満足させるような「論証」を「探さずにはいられない」と述べている。その理由は、カントによれば、「このような論証」を伴う神の存在の認識を「わがもの」とすることによって、神に関する「あまたの事柄を明らかにする (aufklären) ことができる」ということが期待できるからである。こうして『神の現存在の論証』では、神の「現存在」の「論証」へと向う形而上学の理論が展開されていくのである。『神の現存在の論証』は論理的な厳密性を追求した形而上学的認識の著作である。引用文(1)および(2)では、神の存在に対して、「自然的な普通の悟性 (自然的な常識)」や「良識 (健全な理性)」による認識が主張されていた。しかし引用文(3)では、神の存在に対して、「探求に慣れている悟性」による認識が提示されている。序文の冒頭段落には、「良識 (健全な理性)」や「自然的な普通の悟性 (自然的な常識)」対「探求に慣れている悟性」という対照がある。

引用文(3)には形而上学的探究への欲求に関する記述がある。カントは、神の存在の認識に関して明白な概念を獲得したいと欲している。カントの学問的探究への欲求に関する記述は、『神の現存在の論証』以前の著作『天界の一般自然史と理論』(1755)にも認められる。「まして人間が来世でどうなるか、われわれは推測することさえできない。それにもかかわらず人間の心の知識欲 (Wißbegierde) は、きわめて貪欲に (begierig) これほど自分からかけ離れた対象にかぶりつき、このような認識の暗闇の中で (in solchem dunkeln Erkenntnisse) いくばくかの光 (einiges Licht) を得ようと努めるのである。」(A366)ここでは学問的な探究へのきわめて強い欲求が述べられている。浜田はこの記述について次のように述べている。「ここにはカントの純然たる自然研究の内にさえもひそむ、人間への関心の大きさが示されていると同時に、その関心がいまだもっぱら『知識欲』ないし『好奇心』によるものであることが明らかに語られている。カントの学問的探究への欲求に関する記述は、『神の現存在の論証』とほぼ同時期に記された『覚え書き』にも見られる。「私は傾向性からしても研究者 (Forscher) である。私は認識への激しい渴望 (ganzter Durst) と、認識においてさらに進みたいというあくなき貪欲さ (begierige Unruhe) を感じ、また認識を獲得するたびに満足を覚える。」(A44)『天界の一般自然史と理論』では「知識欲」と表現された学問的探究への欲求は、『神の現存在の論証』では「正当な欲求」と表現されている。「探求に慣れている悟性」の欲求は「正当な欲求」(billige Begierde) である。

しかし、『神の現存在の論証』と『覚え書き』の間には看過できない変化が認められる。後者では、認識の拡大こそが「人類の名誉」になるのだというカントの考え方に対する、根本的な反省の記述が出現するのである(『覚え書き』A45)。カントが『覚え書き』で打ち明けた反省の

思考は『実践理性批判』（A77）へと継承される。「知識欲」から「正当な欲求」へ、そして学問的探究に関わる価値観の転換へとという変化の延長線上に批判期道德哲学がある。『神の現存在の論証』の出版の完了は1762年の12月中旬頃までであり、「覚え書き」の執筆期間は1763年から1764年までである。われわれが『神の現存在の論証』を、批判期道德哲学への過渡期に位置する著作として読むことは不可能ではないであろう。

二. 自然神学的証明

カントは『神の現存在の論証』の「第二部」の「第五考察」で、神の現存在を「神の作用」から認識する方法について論じている。カントはこの方法を三種類に分類し、「第二種」と「第三種」の方法を「自然神学的方法」と名づけている。「第二種」の「自然神学的方法」は在来の自然神学の方法であり、「第三種」の方法は「自然神学の改善された方法」である。これはカントによって改善された方法である。在来の自然神学についてのカントの説明には、「悟性の普通理解力」（良識）に関する記述がある。

「これに反して、良い性質の人間は、自然の秩序に見られるような極めて多くの偶然的な美しさと合目的な結合を正しく観察することによって、偉大な英知と力とを伴った意志をそこから推定するのに十分な証拠を見いだすのである。この確信のためには、この確信が有徳の振る舞いに（zum tugendhaften Verhalten）十分なものでなければならぬ限りでは、つまりこの確信が道徳的に確実なものでなければならぬ限りでは、悟性の普通理解力（gemeine Begriffe des Verstandes）で十分なのである。」（『神の現存在の論証』A116）

カントによれば、「自然の美しさ」は「必然的な統一を伴って自然の本質的な規則から流れ出る」ものである（『神の現存在の論証』A118）。しかし、在来の自然神学の方法では、「一般的運動法則が美しくかつ有用な結果と関係がある」とは考えない（同書A120）。在来の自然神学は、「自然の美しさ」を「偶然的なもの」と見なすのである。次いで、この自然神学は、自然の内に見いだされる「合目的な関係」には「作為的な秩序」があるということを示す。在来の自然神学の方法は、この「作為的な秩序」から神の意志を推論して行くのである。

「第二種」の「自然神学的方法」では、自然の内に見いだされる「合目的な結合」から「偉大な英知と力とを伴った意志」へと推論を進めて行く。この神の意志への確信が、「有徳の振る舞い」（tugendhaftes Verhalten）に十分な程度の確信でなければならぬ限りでは、神の意志への確信には「悟性の普通理解力」で十分である。在来の自然神学的証明では、神の意志への確信は道徳的な行為の実現と結びつけられている。神の意志への確信には、人間を「有徳の振る舞い」へと駆り立てるものが含まれている。

カントは「第二種」の「自然神学的方法」に続けて「第三種」の「自然神学的方法」について述べている（『神の現存在の論証』A116）。「第三種の推論のためには、必然的に哲学が必要とされる。」人間を道徳的な行為へと促すのに十分な程度の神の意志への確信には、「悟性の普通理解力」で十分であったのに対して、「真理の偉大さ」にふさわしい「明晰さ（Klarheit）と確信」

を伴って神へと「到達」するには「高次の哲学」が必要である。ここには、「悟性の普通の理解力」に対して「哲学」という対照がある。自然神学的証明は、「第三部」では「宇宙論的証明」として述べられる。

「この宇宙論的証明は、人間の理性 (menschliche Vernunft) と同じくらい古くからあると思われる。宇宙論的証明は、極めて自然で非常に親しみやすい (einnehmend) ものなので、またわれわれの認識の進展とともにその省察をも拡大するので、神をその御業 (Werken) から認識するという高貴な観察に参加したいと願うような何らかの理性的被造物が存在する限り、この宇宙論的証明は存続するに違いない。ダーラムやニューウェンティートをはじめとする多くの人びとの努力は、この意味では人間の理性にとって名誉なことであった。それは、さまざまな自然学的認識やまた妄想にさえ、宗教的な熱意の名によって尊敬すべき外観を与えるという空しいことが時には紛れ込んでいたにもかかわらず (obgleich), そうなのである。このように優れているにもかかわらず (Bei all), この証明方法は依然として数学的な確実性と厳密性を持つことができない。」(『神の現存在の論証』A160)

カントによれば、「宇宙論的証明」は「極めて自然で非常に親しみやすいもの」である。また「宇宙論的証明」は「神の御業から認識する」証明方法である。「自然」であること、「親しみやすい」こと、「神の御業から認識する」こと、神の存在証明方法のこのような特徴はすべて、「第二種」の自然神学的証明の特徴として述べられているものである(『神の現存在の論証』A116,117)。カントが『神の現存在の論証』で「宇宙論的証明」と呼ぶ証明は、「第二種」の自然神学的証明のことである。またカントにとって、「自然」であることや「親しみやすい」ことは、「自然神学的方法」に対するカントの高い評価の根拠である。カントは、「自然神学的方法」が「自然的」であり「親しみやすい」からという理由で「自然神学的方法」が「非常に優れている」と評価するのである。

カントは、この自然で非常に親しみやすい「宇宙論的証明」に極めて高い価値を見いだしている。カントによれば、従来の「宇宙論的証明」には「空しい」ものが含まれている「にもかかわらず」、宇宙論的証明方法の論者達の努力によって「人間の理性」に「名誉」が与えられた。カントは引用文の前半部で、「人間の理性」に優れた価値を認めた「宇宙論的証明」への高い評価を表明している。「このように優れているにもかかわらず (Bei all)」, 宇宙論的証明方法は「依然として数学的な確実性と厳密性を持つことができない。」宇宙論的証明方法による神の存在の確信には、「最も無遠慮な懐疑癖をもものともしない詳細さはなはだ欠けているのである」(『神の現存在の論証』A160)。

「宇宙論的証明」に対するカントの相反する評価は、冒頭段落におけるカントの二つの主張と一致している。冒頭段落では神の存在に対して、一方で「良識」による認識が主張され、他方で形而上学的認識の意義が主張されていた。神の存在の認識に関する、カントの思考の二つの方向が、「宇宙論的証明」への相反する評価となって現れているのである。宇宙論的証明方法への批判は、形而上学的認識を志向する立場からの批判である。

同様のことが、二種類の自然神学的証明の提示にも言えるだろう。「第二種」の「自然神学的

方法」では、道徳的な行為を促進するのに十分な程度の神の意志への確信には、「悟性の普通の理解力」で十分であった。「第三種」の方法はカントによって「改善された」方法であり、この方法は「高次の哲学」を必要とする方法であった。「第二種」の「自然神学的方法」から「第三種」の方法への移行は、冒頭段落に現れるカントの思考の二つの方向の現れであると見ることができるであろう。冒頭段落に現れるカントの思考は、「第三部」の「第四考察」の最後の二段落にも現れる。

「したがって私が、ライマールスがその自然宗教に関する書物で述べているような神とその諸属性に関する重要な認識についての詳論の方に、論理的な厳密さに重きを置いた他のどの証明よりもまた私自身の証明よりも上位に、有用性という優位を喜んで認めるとしても、それは他人の賞賛を切望するお追従の策略ではなく正直な気持ちなのである。というのは、主として健全で美しい (gesund und schön) 理性を作為なく使用しているこの人物のあれこれの著作の価値を考慮するまでもなく、このような根拠は実際大きな証明力を持っており、論理的な抽象概念よりいっそう直観を喚起するからである。それは、論理的な抽象概念が対象をより厳密に理解させるにもかかわらず (obgleich), そうなのである。」(『神の現存在の論証』 A161)

カントはここでライマールスの「自然宗教」に関する著作を極めて高く評価している。それは、カントがライマールスの神の認識に関する論述を、カント自身の神の存在証明よりも上位に位置づけているほどである。カントは「第四考察」の後半で、カント自身による「存在論的証明」と「宇宙論的証明」の優劣を論じている。ライマールスの神の認識に関する論述は「宇宙論的証明」に属する。ライマールスの「自然宗教」に関する著作は「健全で美しい理性」による論述である。カントによれば、「このような根拠は実際大きな証明力を持っており、論理的な抽象概念よりいっそう直観を喚起する」のである。冒頭段落の「良識 (健全な理性) の使用」の主張の箇所と同様、この「健全で美しい理性」による論述の記述には、obgleich によって導かれる従属節が付随している。カントは、「論理的な抽象概念」が神について「より厳密に」理解させる「にもかかわらず (obgleich), 「健全で美しい理性」による論述には、神に関する大きな証明力があるのだと主張している。ここには、「論理的な抽象概念」に依拠する認識に対して、「健全で美しい理性」による認識の優位が認められる。ところが次の段落でカントの思考は一転する。

「それにもかかわらず (Gleichwohl), 探究する悟性はいったん探究の道に踏み出したからには、探究する悟性の周囲が完全に明るく (licht) なるまでは、またこう表現してよいなら探究する悟性の疑問の円環が完全に閉じるまでは満たされないのだから、きわめて重要な認識において、本書のような論理的な厳密性にかけられた努力を誰も無益で余計なものとは考えないであろう。」(『神の現存在の論証』 A161)

この段落は「それにもかかわらず (Gleichwohl)」という副詞で始まる。この前段落では、論理的な抽象概念が神について「より厳密な」理解をもたらす「にもかかわらず (obgleich), カントは「健全で美しい理性」による論述に優位を認めていた。「それにもかかわらず」, 形而上学

の探究者には、周りのすべてを「明るく」したいという欲求がある⁹。そして神の存在の認識における「論理的な厳密性」のための「努力」は決して「無益で余計なもの」ではない。「第三部」の「第四考察」の最後の二段落には、「健全で美しい理性」に対する「探究する悟性」という対照がある。

三. 良識の哲学

これまでの考察から、『神の現存在の論証』における「良識」と「形而上学」に関するカントの思考法について次のように整理することができる。第一に、カントの思考には「良識」による認識と形而上学的認識という対照的な枠組みがある。「良識」による認識と形而上学的認識という思考枠組みは『神の現存在の論証』の「序文」の冒頭段落から「第三部」の最後の部分に至るまで現れている¹⁰。第二に、神の存在の認識には「良識」による認識で十分である。カントは「良識」による自然神学的証明や宇宙論的証明 (A161) を高く評価する。神の存在の認識は形而上学的認識には依存していない。「良識」による認識には形而上学的認識の要素、例えば「論証」や「概念の精確さ」などはない。しかし形而上学的認識の不在は問題ではない。神の存在の認識のためには「良識」による認識で十分であり、形而上学的認識は必要ではない。第三の特色は形而上学的認識に対する「良識」による認識の優位である。このようにカントには、神の存在の認識には「良識」による認識で十分であること、形而上学的認識への非依存性、形而上学的認識に対する「良識」による認識の優位という思考がある。「それにもかかわらず」カントは、神の存在の認識に関する形而上学的探究の意義と有益性を主張してやまない。これが『神の現存在の論証』における第四の特色である。

われわれは『神の現存在の論証』にカントの二つの志向を確認することができる。一方には「良識」による認識への志向があり、他方には形而上学的認識への志向がある。また、obgleichによって導かれる従属節から一転してGleichwohlで始まる文へと転換する文章の構成に、「良識」による認識と形而上学的認識に対するカントの思考の揺れを見ることも可能であろう。『神の現存在の論証』では、「良識」による認識と形而上学的認識との間につながりは無いように思われる。形而上学的認識に対する「良識」による認識の優位と形而上学的認識の意義は関連づけられることなく論じられている。

この二つの志向には、それぞれ「良識」の力に対するカント自身の高い評価と、カント自身の形而上学的探究への欲求が対応している。カントはライマールスの著作をきわめて高く評価していた。ライマールスの著作への高い評価は、カント自身の「正直な気持ち」の表明であった。ライマールスの著作への率直な賛辞の理由は、「良識」の力に対するカント自身の認識にある。カントには「良識」が大きな力を持っているという認識がある。その一方で本論文の第一節で確認した通り、カントには形而上学的探究への熱烈な欲求がある。『神の現存在の論証』には、カントの内にあるこの二つの方向がそのまま反映されている。『神の現存在の論証』では、「良識」による認識と形而上学的認識とはそれぞれ別の次元で理解されているのである。

カントは『神の現存在の論証』の「序文」の冒頭で次のように述べている。「われわれのあらゆる認識の中で最も重要な認識、すなわち『神は存在する』という認識は、深遠な形而上学的探

求の助力 (Beihülfe) を欠くならばぐらつき危機に瀕する (wanken und in Gefahr sein) というほど、私は本書のような努力がもつ効用について高い評価はしていない。」神の存在の認識には「自然的な普通の悟性」による認識で十分である。

カントは『基礎づけ』の「序文」でも「ごく普通の悟性 (常識)」による認識を高く評価している。「純粹実践理性の批判は、純粹思弁理性の批判ほどに是非とも必要というわけではない。」なぜなら「人間の理性は道徳的な事柄に関しては、ごく普通の悟性 (常識) においてさえ、容易に高度の正確さと綿密さに達することができるからである」(GMS391)。

カントの「良識」への高い評価は、『基礎づけ』の「第一章」の終わりで哲学との対照の内に再び現れる。「普通の人間理性」は道徳的な判断のための基準を持っており、「生じてくるすべての事柄に関して、何が善であり何が悪であるのか、何が義務に適い何が義務に反しているのかを区別するすべを実によく心得ている」。したがって「正直で善良であるために、それどころか賢明で有徳である (tugendhaft) ために、何をしなければならないかを知るためには学問も哲学も必要ではない。」(GMS404)『神の現存在の論証』では、神の存在の認識には「良識」による認識で十分であること、また形而上学的認識への非依存性が確認された。この形而上学的認識への非依存性という主張は『基礎づけ』における対照的な関係にあっても揺るぎ無い。

道徳の問題に関しては「普通の人間理性」(良識)による認識で十分であり学問や哲学は必要ではない。「人間の誰もが為さねばならぬこと、したがってまた知らねばならぬことは、誰でも、ごく普通の人間でも知っている。」(GMS404) カントによれば、「普通の悟性」による、行為の道徳的な価値に関する決定の正しさは「哲学者」のそれと同じ程度にある。「それどころか、この点では、普通の悟性は哲学者自身よりもっと確実なくらいである。」したがって、「道徳の事柄に関しては、普通の理性判断でよしとしておいたほうが当を得ているのではないだろうか」(GMS404)。カントは、「道徳の事柄」に関しては学問の領域へ踏み入ることなく、「普通の理性判断」だけにとどめておく方が良いのではないかと問いかけるのである。

しかしカントは続けて学問の必要性を論じる。学問の必要性は道徳をその墮落から守ることにある。人間の内には道徳に抵抗しようとする「欲望や傾向」がある。カントによれば、この強い「欲望や傾向」のために、人間は義務としての道徳を「われわれの願望や傾向」に適合するものにしようとする。これはカントにとって道徳の墮落を意味している。それゆえ、「実践的な普通の理性」は「哲学に助け (Hilfe) を求めずにはいられなくなる」のである。「普通の人間理性」は、道徳哲学によって「普通の人間理性」自身の道徳原理を明瞭に教示されるのである (GMS405)。「基礎づけ」では、道徳に対する哲学的認識はこの原理の解明によって獲得される。

カントは『基礎づけ』の第一章の終わりで「かくて、われわれは普通の人間理性の道徳的 (moralisch) 認識においてその原理にまで達した」述べている (GMS403)。この一文は『基礎づけ』の序文の記述に対応するものである。カントは『基礎づけ』の序文の終わりで、道徳の「普通の理性認識」から道徳の「哲学的な認識」へ「移行」することを述べている。『基礎づけ』における道徳哲学の展開は、道徳に関する「普通の理性認識」から出発する。カントは、「普通の人間理性の道徳的認識」から出発して、道徳の哲学的な「原理」に達したのである。ここで「原理」とは「行為全般の普遍的合法則性」という原理であり、意志が「善意志」であり得るための原理である。

「普通の人間理性の道徳的認識」の根底には「普遍的合法則性」という原理がある。もちろん「普通の人間理性」は、このような抽象的な形式でこの原理を意識しているわけではない¹⁰。しかし、「普通の人間理性」の内にはこの「原理」が在り、この「原理」が道徳的な判断の基準として作用している。「普遍的合法則性」という概念は、道徳的な価値の条件である「善意志」の概念である。カントは「普通の人間理性」を起点として、この「普通の人間理性」に内在する道徳哲学の基礎原理を展開した。このようなカントの道徳哲学展開の思考法は、「善意志の概念」と「自然的な良識」に関する記述にも現れている。「善意志の概念」は「自然的な良識に備わっており、教えられるというより、むしろただ明らみに出される必要のあるものである」(GMS397)¹¹。

カントは「善意志の概念」を明るみに出す(aufklären)ことが「必要」であると述べている。『神の現存在の論証』において、形而上学的認識の意義は「良識」による認識との対照的な位置づけの内に論じられ、ここでも形而上学的認識の意義は対象について「明らかにする」(aufklären)ことにある¹²。しかし、対象の認識は「深遠な形而上学的探求の助力(Beihülfe)を欠くならばぐらつき危機に瀕する(wanken und in Gefahr sein)」というわけではない(『神の現存在の論証』A65)。他方『基礎づけ』では、「善意志の概念」を明るみに出すことの必要性は道徳哲学の必要性にはかならない。道徳の問題に関しては「自然的な良識」による認識で十分である。「無垢であることは素晴らしいことである。ただ、他方において、大変困ったことにそれは保たれがたく誘惑されやすい。」ここに道徳哲学の必要性と道徳哲学展開の意義がある。「実践的な普通の理性」は、「われわれの理性の完全な批判においてしか安定(Ruhe)を見いださないであろう」(GMS405)。

『基礎づけ』には「良識」と「哲学」という対照的な思考枠組みがあり、この対照的な思考枠組みの中で、道徳の問題に関しては「良識」による認識で十分であり、「哲学」は不要であることが主張される。しかし、その一方で『基礎づけ』では「哲学」の必要性が論じられ、道徳哲学が展開されていく。『神の現存在の論証』でも、「良識」と「形而上学」という対照的な思考枠組みがあり、「良識」への高い評価と「良識」による認識で十分であるという主張、また形而上学的認識への非依存性が確認された。他方『神の現存在の論証』でも、形而上学的認識の持つ意義が主張され、形而上学が展開されていくのである。『神の現存在の論証』における「良識」と「形而上学」に関するカントの思考法には、『基礎づけ』における「良識」と「哲学」に関する思考法への萌芽がある。

『神の現存在の論証』では、「良識」による認識と形而上学的認識との間につながりは無いように思われた。「良識」による認識への志向と形而上学的認識への志向とは、交わることのない二つの軌道を描いていた。カントは一方で「良識」の優位と形而上学的認識への非依存性を主張し、他方で形而上学的認識の有益性と意義を論じていた。しかし『基礎づけ』で二つの軌道は一つに重なる。『基礎づけ』では、「良識」は道徳哲学展開の出発点である。ここでも「良識」による認識で十分であるという思考は保たれ、この「良識」は哲学展開の出発点に位置づけられる。カントは「良識」を起点として、「良識」による認識の根底にある道徳哲学の基礎原理を展開する。『神の現存在の論証』における二つの志向は、哲学が「良識」を出発点とし、この「良識」に内在する道徳の基礎原理を明らかにするという道徳哲学展開の思考法の内にひとつに重なる。批判期道徳哲学展開の思考法は、『神の現存在の論証』に認められた「良識」による認識と形而

上学的認識という二つの思考の発展形態にはかならない。『神の現存在の論証』でそれぞれ別の次元で理解されていた「良識」による認識と形而上学的認識は、『基礎づけ』でひとつの道徳哲学の展開の内に、言わば良識の哲学として確立されるのである。

註

- 1 以下『基礎づけ』とする。カントの著作の頁はアカデミー版カント全集によって表記し、『基礎づけ』の場合には略号 (GMS) を付して表記する。
- 2 浜田義文『若きカントの思想形成』第四章第四節、第五章第四節参照、勁草書房、1986。
- 3 拙論「カントの道徳思想における「自然的な良識」とJ.J.ルソー」参照、『フランス教育学会紀要』第14号、2002。『神の現存在の論証』の出版は、1762年の12月中旬には完了していたと今日では考えられている。『基礎づけ』の出版は1785年である。その二年前に出版された『プロレゴメナ』(1783)には、「普通の悟性(常識)」(良識)についての簡潔な説明がある。「普通の悟性(常識)」(良識)とは、「規則を抽象的に認識する能力である思弁的な悟性とは異なって、規則を具体的に認識し使用する能力である」。「良識」に関する同じ主旨の説明が『人間学』(A139, 1798)にもある。「良識」による認識と学問に依拠する認識という対照的な枠組みは、『基礎づけ』以後の著作では『人間学』や『判断力批判』にまで及んでいる。
- 4 浜田義文、同書、p.285参照。
- 5 カントは、在来の自然神学の問題点として、自然科学的思考に対するその否定的な姿勢を考えている。
- 6 浜田義文、同書、p.240参照。
- 7 カントは、在来の自然神学的証明について、「誰もが (ein jeder) この方法から着手する」ので、この「方法」は他のどの方法よりも「自然である」と特徴づけている(『神の現存在の論証』A117)。自然に関するこのような思考は『覚え書き』にも認められる。「自然的であることと非自然的であることの試金石」は、「すべての人間 (allen Menschen) に共通で (gemein) あり得るかどうか」ということである (A35)。
- 8 ここで「探求する悟性」(forschender Verstand)は「哲学者」の「悟性」を意味する。『神の現存在の論証』(A117)参照。
- 9 『神の現存在の論証』は次のように終わる。「神の現存在」を「論証」することは、「神の現存在」を「確信」することと同じくらい必要であるというわけではない。小倉志祥は、この最後の一文について次のように述べている。「カントは神を確信している。この確信は彼の全人格の基盤である。それゆえに、それを論証する必要はない」(小倉志祥『カントの倫理思想』、東京大学出版会、1972、p.24参照)。本論文でこれまで確認してきた通り、カントには、「良識」による認識を通じて神の存在を十分に確信することができるという思考がある。本論文では最後の一文に、「論証」へと向う形而上学的認識への非依存性というカントの思考の現れを読む。
- 10 この記述は『実践理性批判』の道徳教育方法論にも登場する (A155)。
- 11 『基礎づけ』におけるカントの道徳哲学展開の思考法とカントの道徳教育方法論の思考法との関係については拙論「カントにおける道徳教育方法論の思考法」参照、『教育哲学研究』第83号、2001。
- 12 カントによれば、形而上学的認識によって、「対象に関するあまたの事柄をさらに明らかにする (aufklären) ことが期待できる」(A65)。「高次の哲学のみ」が「明晰性」(Klarheit)を伴って「対象に到達できるのである」(A116)。「探求する悟性」は、その「周囲がすべて明るく (licht) なる」まで満たされないものであり、形而上学的認識のため「努力」を「誰も無益で余計なものとは考えないであろう」(A161)。

(博士後期課程三回生、教育学講座)

The way of thinking about common sense and metaphysics in Kant's *The One Possible Basis for a Demonstration of the Existence of God*

NAKAZAWA Tetsu

There is a contrast between common sense and metaphysics in Immanuel Kant's *The One Possible Basis for a Demonstration of the Existence of God* (1762). The knowledge that there is a God does not rest upon metaphysical inquiry. Common sense is sufficient for this awareness. Nevertheless, Kant developed metaphysical theory because metaphysics could explain much more.

There is a contrast between common understanding and philosophy in *Groundwork of The metaphysic of morals* (1785). In moral matters, common understanding can easily be brought to a high degree of correctness and accomplishment. Furthermore, there is no need for philosophy to know what one has to do in order to be honest and good, and even wise and virtuous. Still, Kant explicated philosophic moral principles in order to protect common understanding itself.

The intellectual framework of common understanding and philosophy in *Groundwork of The metaphysic of morals* originated in Kant's construct of common sense and metaphysics in 1762. Thus, Kant's thinking about common sense and metaphysics developed into his philosophy of common understanding.